想い届け!! Vol.7

新地の子

常務理事　上代 直紀

私は1969年(昭和44年)7月生まれの52歳。私の母、山名和枝(当協会副理事長)が独立し「クラブ山名」という店を始めたのが1968年(昭和43年)6月。クラブ山名は私の1年先輩、生まれた時にはすでに母は「北新地のクラブのママさん」だった。

女性が働きながら子育てや保育をできる環境がない50年前、店を始めたばかりの母には、仕事と子育ての両立は難しかった。私は赤ん坊の頃から母の兄夫婦、私にとっては伯父と伯母に預けられ、社会に出るまで彼らの家庭で育った。母に会うのは週に1回、連休やお正月にだけ連続して会うぐらいの関係。平日は寝泊まりも別。土曜日は今でも休みではない。

「水商売の家の子」… 幼少の子供でも、自分が特殊な環境で育ち、我が家は普通の家庭ではないということが容易に把握できた。子供は通常なら、普段の生活に母親がいないことに寂しさを感じたり、愛情に飢えたりするのかもしれないけれど、私にはそういう感情になった覚えがない。

その理由はまず、伯父と伯母が愛を持って育ててくれたこと。そして、母が死ぬもの狂いで働いている姿を見ていたから…。「夜の商売」のはずの母は、私がいつ見ても朝から夜中までずっと働いていた。週に1回会える休日でさえ、お客様への御礼状を書いたり、ゴルフや演劇などのお付き合いに奔走していた。

「水商売」という職業が今よりはるかに社会的地位が低く「ええ加減な人間の集まり」だと思われていた時代に「水商売だからこそ、世間の皆様に誤解されない、バカにされない生き方をしよう」と常日頃から言われていた。実際、周りの人たちの見る目が少し違うことにも気付いていたので、私にはこの言葉が心の支えになった。私の店名「Minority(マイノリティ)」は、このようなことから由来している。

昭和の時代の北新地は、いつも街に人がごった返していた記憶がある。今でもその光景をはっきり覚えている。とても良い時代だったと思う。

私が高校、大学を経て企業に就職した頃は、「オカンは仕事ばっかりして、つまらん人生やな…」と反発? していた時期もあったかもしれない。若い頃は北新地にも興味がないし、社用で行けるほどの身分でもなかった。まさか会社を辞めて自分も北新地でお客様商売をするなんて、当時は想像もしていなかったけど、北新地で店を始めてからは特に、このような仕事を長い間続けることの大変さ、第一線で活躍し続ける母の積み上げた努力、苦労、偉大さを身にしみて感じることになった。

「生まれ変わってももう一度この仕事がしたい」と常に話す母には、まさに「天職」なのだろう…。15年ぐらい前だったか、母と一緒にゴルフに行った時に、彼女がグリーン上で他の方からオッケーパットをいただいた時に、それを断りながら発した「私の人生にオッケーなんかないねん…」という一言が忘れられない。まさに母らしい「人間は甘えて生きてはいけない」というメッセージも心に響いた。ただ、私は現在86才のこの母に、十分すぎるほどの「オッケー」を差し上げたい。「仕事人間」としてではなく、「母親」として…。

私が小さい頃、私と母はひとつ屋根の下で生活はできなかった。「水商売の子に生まれて、寂しい思いさせてごめんな…」と、何回も謝られたことも覚えている。しかし、本当に寂しかったのは、そして、親子の愛が欲しかったのは、私ではなく、母だったのではないかと感じている。

あともう一つ、母が発した忘れられない言葉がある。「お客様にもらうことばっかり考えてるホステスは失格。まず自分がお客様に何が与えられるのか、何をしてあげれられるかを考えるべき。楽して稼げると思ってるなら、ホステスはやめた方が良い」何事にも、誰にでも通じるこの言葉は、私の人生訓にもなっている。「水商売」には、自覚と覚悟が必要なのだ。

これからは北新地という街とお客様に育てられた母と一緒に、私も恩返しをしなければいけない。北新地が培った品格、これはお客様だけではなく、ここで生きている我々みんなが努力して創り上げるもの、守るものだと痛感している。母は当協会で長年、副理事長という役目を仰せつかってることで、皆様のご支援、ご尽力のおかげで、お国から勲章までいただいた。

私は所詮、いつまで経っても「親の七光りのバカ息子」だが、その御恩にも報いるべく、街の環境保全に貢献したいと思っている。社会的エリートではない私のようなバカでも、恩返しはできる。肩書きや地位なんて、まったく必要ない。北新地が抱える様々な問題を、当協会の皆様と一緒に改善、解決していきたい。

●次号は上代常務理事の紹介により、常務理事 徳永真介さんからの投稿です。